

が、ほとんど全滅に近い被害を受けていた。これに類する園が他の地方にも認められた。

(三) 施肥の不適當な園

一般に窒素過用あるいは偏用の園は一見して樹勢が旺盛のようであるが、耐寒性に乏しく、また加里の少ない園あるいは窒素を遅く施した場合等に被害が増大の傾向が認められた。なお窒素の過用によつて被害が助長され、ほとんど全滅に近い被害を受けた園において軽度の紋羽病(幹の下部にも傷害がある)に侵された園光があり、この樹は被害が軽く相当結果が期待される事柄があつたが極めて興味あることである。(写真参照)

(四) 年中、中耕している園

被覆作物を作らず生育期間中中耕してい

る園は被害が一般に多い。これは肥料の分解が遅くまで行われることと、被覆作物による過剰な養水分の吸収が行われないうため、樹体の成熟が遅れるのによるものである。なお江部乙においてクロバリの草生栽培園が割合被害が軽い例があつたが、注目すべきことと考えられる。

(4) 被害部位並びに症状

被害部は枝幹及び芽に分けられるが、枝幹の被害はさらにその部位によつてつぎのように分類される。

(イ) 枝の先枯、(ロ) 枝叉の被害、(ハ) 心部の被害、(ニ) 樹皮の部分死、(ヘ) 樹皮あるいは木部の裂傷、(ホ) 地際部の被害、(ト) 日焼。

これらの被害型について詳細に調査する余裕がなかつたが、一応の観察によれば、枝叉の被害が著しく、一見無被害と思われ

る樹でも、枝叉が淡褐色を帯びているものが多く、被害の激しいものは濃褐に変色し甚しいものは腐敗し始め、腐爛病進行期と思われる症状を呈していた。

樹皮の裂傷も幼・中木にかなり多く、とくに紅玉、祝に被害が多いように見られた。なおこの被害は札幌附近にも見られ、幹の西南面に多い。その他、枝の先枯れや、樹皮の部分的な枯死、枝の心部の変色もかなり多く認められた。地際部の被害はほとんどないが、これは低温の襲来時期にある程度積雪があつたことによるものであろう。

なお全体的な症状として、枝幹部のいずれの部分も樹皮が全体的に生色を失ひ、淡褐色に変色していることが認められた。さらに六月末において枝の背面等の日光の直射を受ける部分の皮部が湿分を帯び、中に

は健全部との境に龜裂を生じているものが認められたが、これは軽度の凍傷を蒙り弱つた樹皮が、その後日焼の害を受けて被害が一層進行し、水分を滲出するに至つたものと考えられる。

つぎに芽は花芽が弱く、例年主として紅玉に見られるのであるが、本年はほとんど各種の品種が被害を蒙り、平均枯死歩合が四割程度に及ぶものと概算された。

なお被害樹は発芽や開花が不揃いとなり、また葉が小さいばかりでなく、色が淡く、花も普通より小さい。その程度は被害の多少をはつきり表現していた。

以上、今年の凍害の被害状況につき述べたが、なお被害樹の取扱ひあるいは寒害防止の技術的な問題について述べておくが、一まず擱筆することにする。

(筆者は北海道農業試験場技官)

お奨めしたい

苺栽培とその優良品種

白 幡 喜 一

北海道で一番早くとれる果物は苺であり、例年六月中旬から水々しいルビーのような果実が熟れて家庭をにぎわし、店頭を彩つてゐる。長い冬ごもりから解放され、新鮮な果物にうえたわれわれに、こよない自然の贈物と言えよう。

「イチゴとミルク」これは農業を営む人ばかりでなく、都市に住む人々も、すべての近代人があこがれる言葉であり、フレッシュな感覚にみち、健康的で栄養に富み、聞くだけでも豊かだなごやかな情景が脳裡にうつる微笑ましい言葉である。

また盛夏の候に涼を求めるイチゴシロップに浮いたストローの感触、イチゴジャムとトーストとの調和など、近代生活になくてはならぬものの一つは苺の加工品である。

りんごやなしのような果樹類は経済栽培のなりたつ地域はいちじるしく制限されるが、苺は品種の選択さえよろしくければ、全国いたるところに栽培ができ、植付けたつぎの年から収穫できる。ところが現在の農村、とくに本道の農村はあまりにも果樹類の栽培と利用に関心が薄い。

「イチゴとミルク」という言葉から連想するとおり、事実、酪農と園芸が組合わされた農業経営が一ばん豊かで、潤いがあり、色彩と香りに富み、生活をたのしめる経営であると思う。北米、カナダ、シベリア等寒地開拓の成功は、耐寒性果樹の導入が大なる力になつてゐるというが、農業即生活、生活即農業である点から、農家は深く考えなければならぬ。

苺は成熟期が府県とかなり時期的に違い、また奨果であるために遠隔地への大量の輸送は不可能であり、粉食、パン食の普及によるジャムやシロップ等加工品の需要もふえ、販売作物として近年都市近郊の栽培熱がさかんになつた。また輸出加工品としても有望であるが、まずもつて農家の皆さんが前庭や菜園の一隅などに二、三畝ぐらゐの苺畑をもち、朝露に冷えた苺を摘んで一家団樂の慰めにしたいものである。いままで東北、北海道で栽培されている苺は、ほとんどその九割までがモナーク種

であつて、一般に品種にたいする関心はきわめて少い。いつたい苺の品種には生態的に寒地型と暖地型とあり、東北・北海道に適するいわゆる寒地型の品種を暖地に栽培すると、二年目くらいより著しく草勢が悪くなり、次第に消えてしまふ。反対に暖地型のを寒地に植えると草勢弱く、果実も貧弱となり、冬枯その他の障碍で成績が上らない。したがつて充分品種の特性を吟味して最適のものを選ばなければならぬ。生食用の苺はどんな条件が大事であるかというに、

- 一 草勢強く豊産であること。
 - 一 大粒で屑類の少いこと。
 - 一 甘味多く、芳香があり、肉質の良いこと。
 - 一 貯蔵力、輸送力に富むこと。
 - 一 色沢の美麗であること。
- 右の五つの特性をもつことが望ましい。前述のモナーク種は草勢強く大粒である

が、その他の条件は欠けている。ところが数年前から当社育種場で研究調査した結果は、フェアファックスとドルセットが寒地型の最も優れた新優良品種で、苺界のホープとして好評を博している。よつてこの両品種の特性や試験成績の一部を記して、新優良品種の栽培利用をお奨めしたい。

別表によつて知られるように、フェアファックス並びにドルセット種は収量多く、かつ糖分多かつた酸糖率高く、品質の優秀なることがわかる。なお形状、色沢また貯蔵輸送の点においても、まことに優れた特性を持ち、お奨めしたい優良品種である。つぎに該優良二品種につき概説する。

フェアファックス (Fair fax)

本種の原産は米国北東部のメリーランドで、ハワード一七×ローヤルソペリンから育成された寒地型品種で、北海道、東北地方において優れた特性を發揮するが、関東以南のような暖地では成績が上らない。

草勢すこぶる強く、葉片の大きさは中位、暗緑色、皺曲少く、光沢あり、中肋に沿つて上方に反捲する特徴がある。

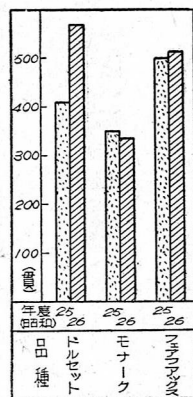
一花梗の花数は十内外、花梗太くして長い。熟期は中生で、開花より成熟までは四週内外で、モナーク種と大体熟期同時期、果は円錐型あるいは楔型で、紅熟すると非常に光沢ある濃紅色となり、外観きわめて美麗である。粒揃いよく、一個普通六〜七匁になり、三十匁程度の巨大果ができることも珍しくなく、本品種を一見した者はひとしくこの大果、美味豊産に驚嘆の目を見張らずにはおれない。食味は酸味少く、酸糖率一九・六を示し、甘く、香気良好で、ビタミン含有量多く、果肉はすこぶる硬く、日持よく、貯蔵輸送にたえることは優れた特質である。

着色は全面紅色を呈し、成熟後急激に進

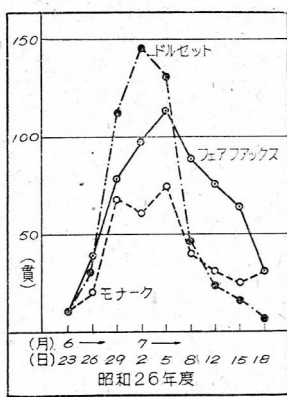
み、暗紅色となる。萼ははなはだ大きく、欠刻あり、上方に捲き、へたはとれにくい。褐斑病及び腐敗病に強く、また耐寒性強く、層果の発生少いので、本道の栽培様式である多年生栽培によつて株の生産力を増加させることができる。二年生株で反当り六百貫の収量は容易で、福島農試では七百五十貫の成績を示している。本種は草勢旺盛で、四年株でも有効生産量を示し、比較的永く作れるランナーの発生は他品種に比

第一表 苺品種及當収量比較表

(雪印藤ノ沢育種場)



第二表 苺の時期別収量圖



第三表 苺實分析成績

完熟期(開花五週間後)

供試品種	還元糖%	滴定酸度	PH	酸糖率
モナーク	四〇	〇・四	三・四	八・八七
フェアファックス	五六	〇・三	四・〇	一九・六一
ドルセット	五三	〇・六	三・八	八・九八

較して遅く、また少い。ために繁殖用育苗は困難な点があるが、定植後の蔓きりの努力軽減上有利な品種である。

多肥栽培とくに堆厩肥等有機質肥料を施用することを望まじい。

熟期を促進し早期収穫するためには、融雪後ビニールを覆うと約三週間くらい早取りでき、高価に販売できる。また往々大切な一番花を枯死せしめる霜害も、ビニール栽培により完全に防止できるので、ビニール栽培は大いに發展性がある。

ドルセット (Dorsett)

フェアファックス種と姉妹品種で、両親は同じで、一九三二年紹介された寒地型の優良品種で、米国においても北部地方に栽培多く、わが国においても前種と共に成績がよい。

草勢すこぶる強く、葉片は小形、濃緑色で、光沢少く、ピロッド状、葉柄長く、草丈は高い。株の分葉多く、花梗は直立して分岐性少く、一花梗の花数十以下、熟期は早生に属し、モナーク種より数日早い。果実は一番顆はすこぶる大果であるが、一般にフェアファックスより小さく四〜五匁程度である。

果肉はフェアファックスほど硬くないが、モナークにくらべて優り、着色は全面鮮紅色となり、萼の鮮緑色と対照的にすこぶる調和よく鮮麗で、収穫後長く置いても暗色とならず、まことに美麗である。

酸味もあり、甘味も強く、酸糖率はモナークに優り、多汁で香気高く、食味良好である。

果肉は内部まで着色し、ほとんど空洞がない。果型は長円錐形で、肩一般に下り、蔓は中位の大きさで上方に反捲する。比較的へた離れがよい。

耐病性強く、耐寒性もある。ランナーの

発生数多く、また株の分けつ力強いから、多年生栽培の場合には多少間引を考慮するとよい。

豊産にして、色沢、品質、成分その他の点で生食用としてまた加工用としても優れ、本種のプレザープ、ジャム製品は優良なものである。

以上の二品種はそれぞれ美点を持つているので、早生のドルセットと中生のフェアファックスの二品種を組合わせて栽培し、その持味を満喫されることをお奨めしたい。

なお植付について略述するつぎのとおりである。

苗の定植期 九月上旬〜十月上旬
定植距離 畦幅二尺五寸内外
株間八寸〜一尺

反当植株数 約五千株内外
肥料(反当り成分)

- 窒素 四・五貫
- 燐酸 三・五貫
- 加里 三・五貫

いちご苗を植付ける圃場は、よく腐熟した堆厩肥を反当り四百貫くらい施し、丁寧に耕耘整地し、普通二尺五寸の畦をきり、油粕(あるいは魚粕、米糠)、過燐酸石灰、木灰(加里)または人糞尿(硫酸)等を施して、よく土壌と混和して覆土、畦立てし、植付準備を行う。この際、未熟堆肥は使わぬよう、また化学肥料を基肥のみに多用するも苗の活着を悪くするから、基肥にはむしろ少く施用し、苗が活着して新葉が出てから補肥として施すのが安全である。

苗の定植の際、根を乾燥させると活着が悪く、また深植すると成育が不良となるから、注意したい。苗の定植の際、灌水すれば活着がよく、また発育も良い。

(筆者は雪印種苗藤ノ沢育種場長)